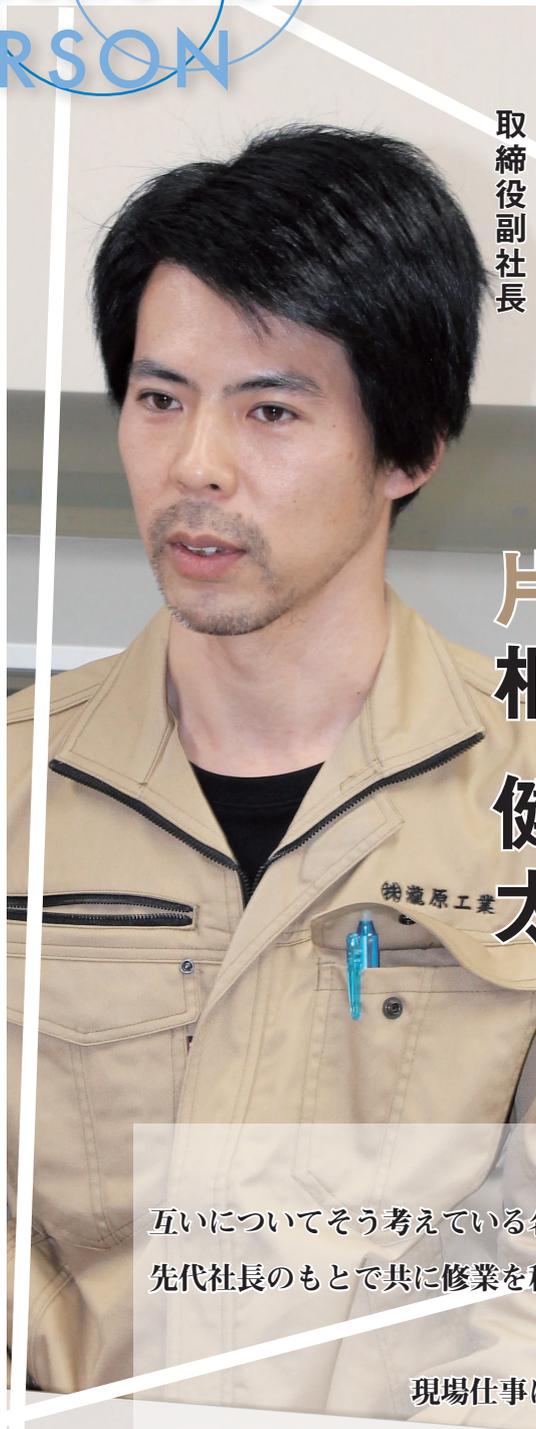


Anchor's PERSON



株式会社
瀧原工業
取締役副社長

片桐
健太



株式会社
瀧原工業
取締役社長

名倉
伸一

同じ価値観を共有できる特別な存在——。
互いについてそう考えている名倉社長と片桐副社長が、共に働くようになって20年が経つ。
先代社長のもとで共に修業を積み、やがて『瀧原工業』を託された二人は、いわば同志だ。
そんな二人が口を揃えるのは、仕事へのやり甲斐と誇り。
現場仕事は若い世代に敬遠されがちだが、その仕事は後世にまで残る。
先代社長から受け取ったバトンを、今度は自分たちが次へ繋いでいく。

「同じ価値観、誇りを共有できる。
同じベクトルで進んでいきたい」

株式会社 瀧原工業

大阪府大阪市淀川区野中北 1-1-63

後世にまで残る仕事への誇り、 そして技術を守り、繋いでいきたい



——早速ですが、『瀧原工業』さんはいつごろの設立なのですか。

(名) 今から24年ほど前、1996年の設立です。私たちが入社したのは、その約2年後のことでした。その後、当社の元請け会社の経営が傾き、その再生のために当社の先代社長が元請け会社の社長に就任されることになり、10年ほど前に下請け会社である当社を私たち二人が引き継ぐことになったのです。

——お二人になら安心して任せられると先代は見込まれたのでしょうか。お二人が御社に入られたのはどういった経緯が？

(片) 私は高等専門学校を卒業後、将来進むべき道を模索していた中で、偶然、求人情報誌で当社を見つけて入社しました。当時は、自分が副社長になる将来なんて思い描きもしませんでしたから、今、こうして責任ある立場を任せていただ



ていることに自分自身、驚いています。

(名) 私は、初めての職業で、鷹職に就いて足場工事に従事しました。20歳のころにはある程度の技術を習得し、別の分野にも足を踏み入れて自分を高めていきたい、学がない分、この腕一本で食べていける職人になりたいと考えるようになったんです。それで、5年ほど海洋工事を経験し、次はどういった仕事で経験を積もうかと考えていた時に当社の求人を見つけて入社しました。実は仕事内容はよく分からないまま面接を受けたのですが(笑)、話を聞いて、好奇心をくすぐられたと言いますか、面白そうだと興味を持ったことは今でも覚えています。専門性が高く、他の人にはない技術を習得したいと常に考えていた私にとって、当社と出会えたことは幸運でした。

——現在は、どういった業務を？

島崎 俊郎 (タレント)

「年の差は6つあるもののほぼ同時期に入社した同期である名倉社長と片桐副社長。お互いにとって良きパートナーでいらっしゃる感じました。先代社長という頼れる師匠もおられ、共に事業に励むことができる存在は、日々の原動力になっているでしょうね。まだお若いお二人のこれからを心から応援しています！」

(名) 橋梁のメンテナンス工事を軸に鋼構造物・とび土工・土木工事を手掛けています。老朽化した橋の補強に特化しており、関西におけるこの分野では多くの実績を築いてきました。一般的に知られている分野ではなく、少々マニアックな仕事なので、ご存知ない方が多いと思いますね。ニッチな分野なので競合は少ないですが、専門性が高く、特殊な技術が求められます。

——そうした分野に特化できる会社というのはそう多くないでしょうから、御社の存在意義の高さを感じます。今は、特に職人の世界は人手不足のようですが、人材についてはいかがでしょう。

(名) 当社にとってはもちろん、業界全体として若い人材を求めています。特殊な技術なので技術の継承も重要ですからね。現場仕事には、きついというイメージがどうしても付きまといりますが、それ以上に面白くてやり甲斐があります。老朽化した橋がメンテナンスによって息を吹き返す姿を見ると、達成感も大きい。規模の大きい仕事もあり、地図にも残る建造物に関わっているということは、誇りに思えると思います。

——そうした魅力を若い世代に伝えていきたいですよね。

(名) はい。また、待遇面の改善も必要です。職人の業界では給与の増減が大きい日給制がいまだに多いのですが、日給制では安心した生活を送れないのではと考え、当社は職人が働く企業としては珍しい月給制や福利厚生を10年以上前に導入しました。それにより、給与の増減を心配することなく仕事をしてもらっています。今回、取材を受ける機会をいただいて、こういった仕事があることや、その魅力を知ってもらって、興味を持ってくださる方が一人でもいれば嬉しいです。先代社長から受け継いだ技術、知識



取締役副社長
片桐 健太



取締役社長
名倉 伸一

を次の世代に伝えていくのが私たちの役目ですし、この業界が若い世代で活気づくことを望んでいます。

——やはりこれからを担う若い世代への継承は重要な課題なのですね。そうした業界全体の将来にも目を向けておられるお二人ですが、先代から託されてからの『瀧原工業』さんはいかがですか。

(片) 幸いなことに、元請け会社の社長に就任された先代が、私たちに良い仕事をさせたいと考えてくださっており、仕事に恵まれています。

(名) 入札に参加することも厳しい中、当社の仕事の98%が公共工事です。これは、元請け会社からの計らいがあってこそその数字ですので、感謝しかありません。規模の大きな仕事も手掛けさせてもらっており、実績を積みごとに当社の実

力も上がっていると感じますね。

——御社への期待の高さが窺えます。お二人が牽引される御社のこれからの楽しみですか。お互いに良きパートナーなのでは？

(名) 片桐は私よりも6つ下ですが、根性があって、この仕事に誇りを持ち、自分で仕事の面白みを見出して取り組んでいる姿にはいつも良い刺激をもらっています。一緒に働くようになって20年以上が経ち、この仕事のやり甲斐や同じ価値観を共有できる特別な存在ですね。(片) 入社当初からですが、質問や相談に対して答えが的確ですし、私にはない発想やヒントもくれます。頼りがいのある存在ですね。

——今後もお二人で御社を引っ張って行って下さい。

(2020年4月取材)

column | 二人が師匠として仰ぐ先代の存在

▼名倉社長と片桐副社長が、『瀧原工業』に入社したのは同社設立から約2年後のことだ。先代社長のもとで技術を磨き、ノウハウを得てきた二人にとって、先代は今でもかけがえのない存在。「指導は厳しかったが、同時に仕事の面白さも教わった」と社長。「一つできる仕事が増えると、また次のステップに上がるための課題を与えられる。その繰り返しで、着実に成長できるよう目を掛けて育てていただいた」と振り返る。副社長も同様で、「厳しい時もありましたが、技術も、

それから経営のノウハウについても教えてくださったのは先代です。働き方改革が進む今とは違って、現場作業は体力的にも過酷でしたが、そうした時代を経験していることは大きい」と先代のもとで修業した日々が糧となっている。「私たちの相談相手と言え、先代しかいない」——二人は今でも先代に大きな信頼を寄せる。『瀧原工業』を社長と副社長に託した先代の期待、それに応えようと奮起する二人。その師弟関係が、同社の成長を根底で支えている。